GM 鶴牧-3 環の会

第 12 回クラシックを楽しむ会

2014 年 7 月 21 日（月）18:30～21:30

歌劇「フィガロの結婚」（モーツァルト）

第 2 幕の終わり、見事なアンサンブル・フィナーレ

会場等：グラインドボーン音楽祭 1994（1994 年 5 月 28 日）
　　イギリス南部、イースト・サセックス、
　　グラインドボーン（新劇場こけら落し公演）
楽団等：ロンドン・フィルハーモニック管弦楽団
　　グラインドボーン合唱団
指揮　：ベルナルト・ハイティンク
演出　：　スティーヴン・メドカルフ
出演　：ジェラルド・フィンリー（フィガロ）
　　アリソン・ハグリー（スザンナ）
　　ルネ・フレミング（伯爵夫人）
　　アンドレアス・シュミット（アルマヴィーヴァ伯爵）
　　マリー・アンジェ・トドロヴィチ（ケルビーノ）
　　その他

あらすじ

今日は伯爵の従僕フィガロと伯爵夫人の小間使いスザンナの婚礼の日。伯爵はスザンナに邪まな想いを寄せ、あの手この手でモノにしようと企む。一方、夫の愛が離れて嘆いている伯爵夫人に小姓ケルビーノは熱を上げ思わぬ展開に。（第 1 幕、第 2 幕）

伯爵は屋敷の男連中や借金のカタにフィガロに結婚を迫る女中頭と手を組みフィガロとスザンナの婚礼阻止を図る。それが効を奏してか、遂に伯爵は新婦スザンナから闇夜への誘いを受ける。それを知った新郎フィガロの怒り。実は伯爵を懲らしめるための計略だった。（第 3 幕、第 4 幕）

グラインドボーン音楽祭

グライントボーン・ハウスと新劇場、幕間を楽しむ観客

ロンドンの南約 60km にある会場で開催される世界有数の音楽祭。この会場は古い貴族（荘園領主）の邸宅（館）の一角を、資産家のオペラ好き当主が本格的オペラハウスに改装したもの。音楽祭は 1934 年に「フィガロの結婚」を上演してから毎年開催、60 年後の 1994 年、新劇場こけら落としで当時の舞台を再現したのが本公演。第 3 幕の舞台は図書室。英国のカントリー・ハウスと呼ばれる貴族の邸宅にはステータスとして図書室があったこととこの演出は関係があるかもしれない。

ロンドン・ヴィクトリア駅から僅か 1 時間程の距離だが牧場が広がる辺鄙な田園地帯。しかし会場はレストラン等、必要施設とサービスが整っている。多くの観客はロンドンから車でテーブルと椅子を持参し、1 時間半ほどの幕間を英国風ピクニック気分で優雅に楽しむ。

第 12 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**喜歌劇「ウィーンかたぎ」（ヨハン・シュトラウス）** メルビッシュ音楽祭 2007

8 月 17 日（日）18 時開場、18 時 30 分上映開始

昨年に続きウィーン近郊、さわやかな湖上特設ステージのオペレッタを楽しみましょう。

9 月以降、「トスカ」等を予定。

【時と場所】

18 世紀のスペイン、セビリアの貴族アルマヴィーヴァ伯爵の館、従僕と侍女の結婚式当日の一日

【登場人物】

フィガロ：伯爵の従僕、今日夕方にスザンナと結婚式を挙げることになっている

前作「セビリアの理髪師」では理髪師で町の何でも屋。ロジーナとの仲を取り持った功績で伯爵の従僕になった。

スザンナ：伯爵夫人に使える小間使い（侍女）、今日夕方にフィガロと結婚式を挙げることになっている

初夜権復活をもくろむ伯爵から誘いを受けている。一方、伯爵夫人からは・・・

アルマヴィーヴァ伯爵：セビリアの領主で浮気者

前作「セビリアの理髪師」でフィガロの活躍でロジーナと結婚したがスザンナと楽しむために初夜権を復活させようと計略を巡らす。

伯爵夫人ロジーナ：浮気者の伯爵の行動に悩むみながらも、したたかに・・・

ケルビーノ：伯爵の小姓、伯爵夫人に横恋慕している思春期の少年

ドン・バルトロ：医者、ロジーナの叔父

前作「セビリアの理髪師」ではロジーナとの結婚をフィガロに邪魔され恨みを持つ。

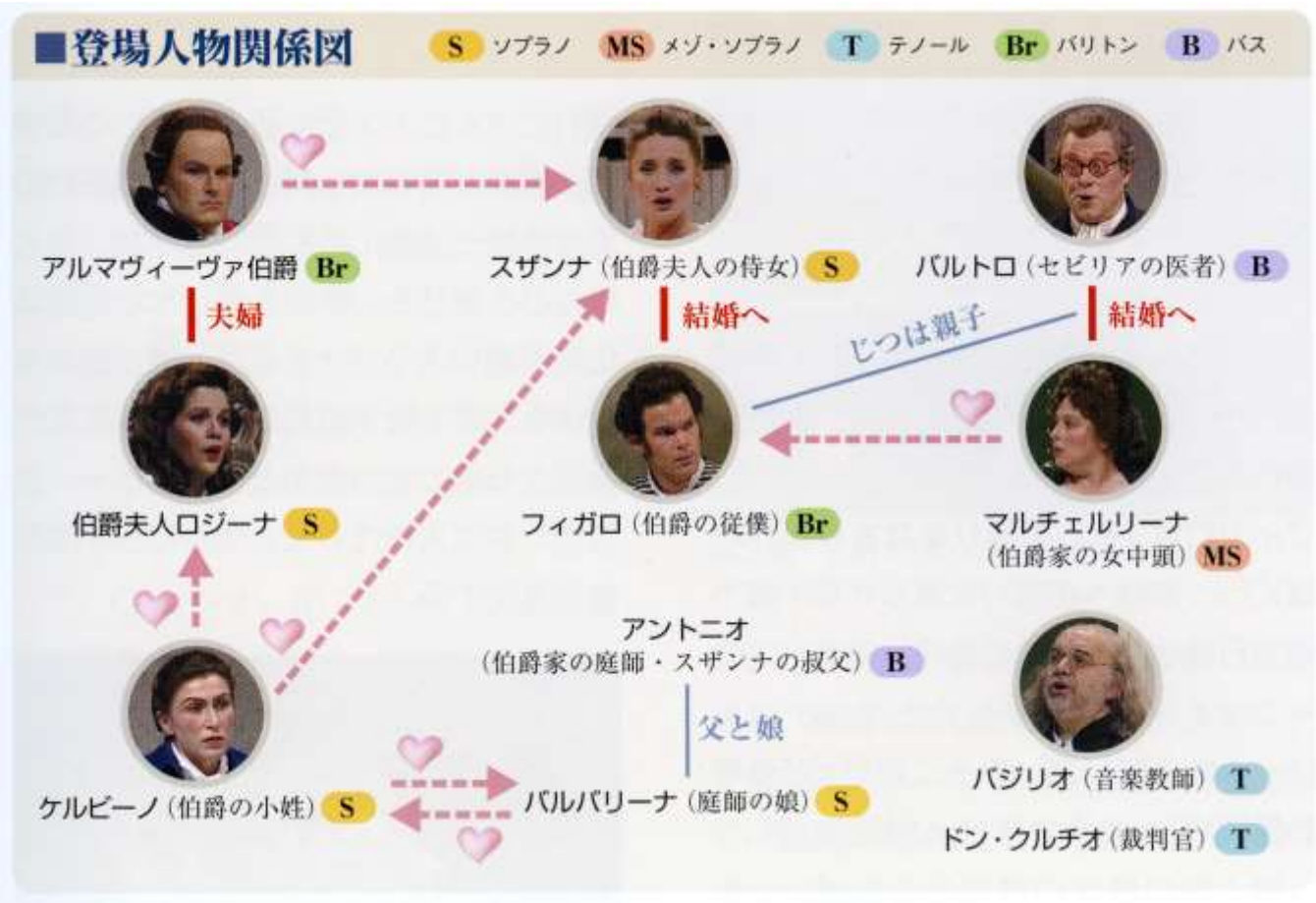
マルチェリーナ：伯爵家の女中頭、教養もあり美人

フィガロに金を貸した時に書かせた証文を利用して年甲斐もなくフィガロと結婚しようと企む。

前作「セビリアの理髪師」では医師バルトロ家の女中。

その他　**ドン・バジーリオ**：音楽教師で伯爵の手下　**ドン・クルティオ**：伯爵言いなりの裁判官

アントニオ：庭師でスザンナの叔父　**バルバリーナ**：庭師の娘でスザンナとは従姉妹ケルビーノの恋人



DVD BOOK 魅惑のオペラ 01「フィガロの結婚」、石戸谷結子のページ引用

【第 1 幕】館の一室（フィガロとスザンナの新婚部屋）、その日の午前

アルマヴィーヴァ伯爵の従僕フィガロは、伯爵夫人の小間使いスザンナと今夕に結婚式を挙げる。ところが、伯爵がスザンナをモノにしようと初夜権の復活を企んでいるので、二人は心配でならない。そこに女中頭マルチェリーナと医師バルトロが登場。女中頭はフィガロが借金を返済できない場合には自分と結婚するという証文を見せ、スザンナと言い争う。一方、小姓ケルビーノがスザンナの部屋を訪れ、女と見れば恋するケルビーノは当のスザンナにも言い寄る。今度は伯爵がスザンナを口説きに現れる。椅子に隠れていたケルビーノは、伯爵に見つかって軍隊行きを命じられる。

【第 2 幕】館の伯爵夫人の部屋（アルコーブ、小部屋付き）、その日の昼前後

最近、夫の愛情が冷めていくことを嘆く伯爵夫人の元にスザンナ、フィガロ、ケルビーノが集まる。伯爵の鼻を明かそうと、ケルビーノを女装させて浮気の現場を押さえる計画をするが、うまくいかない。女中頭のマルチェリーナがフィガロとの結婚を訴え、大騒ぎとなる。

【第 3 幕】館の大広間、その日の午後～夕方

伯爵夫人はスザンナに、伯爵と逢い引きの約束をするよう命じる。夫人はスザンナになりすまして夫の不実を暴くつもり。マルチェリーナの訴えた裁判が始まるが、途中でフィガロがマルチェリーナの実の子で父親はバルトロであることが発覚。バルトロとマルチェリーナも、よりを戻して結婚することになり、親子二組同時の結婚式が賑やかに始まる。スザンナは計画通り伯爵に逢い引きの手紙を渡す。何も知らないフィガロは疑心でいっぱい。

【第 4 幕】館の暗い夜の庭園、その日の夜

暗い庭園でドラマが展開。伯爵はスザンナの衣裳を着た伯爵夫人を口説くが、事情がわかって伯爵夫人に謝罪する。最後に全員が許し合い、愛を讃え合う。

【名曲】

・**「序曲」**は人気が高く単独でもしばしば演奏される。歌劇中のアリアなどと無関係の曲。

・**アリア**（カヴァティーナ、アリエッタを含む）は古今を通じて親しまれている。

第 1 幕、早熟な美少年ケルビーノが恋に恋して**「自分で自分がわからない」**

軍隊行きを命じられたケルビーノをフィガロがからかい、励まして**「もう飛ぶまいぞこの蝶々」**

第 2 幕、愛する夫の不実を伯爵夫人が嘆き**「愛の神様、慰めの手を差し伸べてください」**

ケルビーノが年上の女性にあこがれて**「恋とはどんなものかしら」**

第 3 幕、夫の浮気をたしなめるため侍女と入れ替わる伯爵夫人の嘆き**「楽しい思い出はどこへ」**

第 4 幕、スザンナに裏切られたと思い込むフィガロの**「さあ目を開けろ」**

・**アンサンブル（重唱）**と**アンサンブル・フィナーレ**はこの歌劇の重要な特徴。

それまでの歌劇はアリア主体でその都度ドラマの進行が停止していた。モーツァルトはアンサンブルとアンサンブル・フィナーレで舞台を絶えず生き生きと**「動く情景」**に変えた。以下はその主な例。

第 1 幕、新婚を迎える準備に忙しいフィガロとスザンナの二重唱、伯爵の企みに雲行きが怪しく。

第 2 幕、伯爵を懲らしめるためケルビーノに女装させようと、・・・そこに伯爵が入ってくる。

第 2 幕、伯爵と伯爵夫人の言い争いから始まるアンサンブル・フィナーレは 20 分近く続く。登場人物が順次増えて最後は 4 人の組と 3 人の組の対決の形でクライマックスを迎えて幕となる。登場人物が加わるごとに調性も拍子も変化し、楽器も増える。言葉が分からなくても引き込まれる。

第 3 幕、裁判官に宣告されて絶体絶命のフィガロ、ところがどんでん返しで親子二組の結婚式に・・・。

第 4 幕の最後は、登場人物全員が混乱の一日も終わったとはれやかにアンサンブル・フィナーレ。

【オペラ・ブッファ】

「フィガロの結婚」は**オペラ・ブッファ**の最高傑作の一つ。それまでの王侯貴族が楽しむ神や古代の英雄を扱う**オペラ・セリア**に対して、召使など身近な人物を主人公にした喜劇。原則として 2 幕構成で**「三一致の法則」**（一日の内に、一つの場所で、一つの行為「筋」だけが完結する、という劇作上の制約）に従い、重唱、合唱を多用し、幕切れの音楽はしばしば**アンサンブル・フィナーレ**（幕の最後で登場人物が順次増え、演奏する楽器も増やしてクライマックスを盛り上げる）となる。